

氏名 胡 穎芝

本論文は、明治期の代表的な作家である夏目漱石（1867-1916）を研究対象にし、「向う側」というモチーフを手がかりとして、その文学と思想における東洋思想の影響を論じており、とくに晩年の「則天去私」思想の形成について究明してみた。漱石の現実世界から逃げ出す傾向は、彼が自分の創作の中で「向う側」世界を一時的な避難所として作り上げる作風に反映されていると考察した。さらに、このような「向う側」世界と漱石の晩年に提唱した「則天去私」思想が共に「東洋思想」を根底とし、とりわけ道家思想の影響が顕著であり、彼が心の癒しとしての「向う側」世界から、晩年の「則天去私」思想へと発展していったと指摘した。しかも、漱石の東洋思想の受容を考察する作業は、漱石研究における重要な課題だけでなく、明治・大正時代の老荘思想および東洋哲学の受容史を整理するために、その前置き作業に相当すると思われる、これこそ本研究の意義である。

本論文は、本文の四章によって構成される。

第一章では、漱石が「実体のない」という特徴を持っている仙境を小説と漢詩に登場させる背景には、現実世界に対する不満や悩みから逃避したいとの願望が空想世界への憧れを生み出したことは間違いのないと思われ、近代化に苦しむ日本人（もちろん彼自身も含めて）に精神的な避難所を提供しようとしたが、そこはあくまでも暫時の避難所にすぎず、彼を近代化の軋轢から完全に解放してくれる場所としては見出されなかったのである。

漱石は東洋伝統である「仙境」によって一時的な慰藉を得たとしても、明治日本に生きている知識人として、やはり現実世界の問題は現実世界にしか答えを追求できないと覚悟していたと考える。彼は作品においてその脱俗願望を表出しているが、彼は決して俗世から完全に離れて山林に隠棲しようとする人間ではなかった。権威への反発と脱俗への願望を持ちながらも人間世界にあって活動し続けるのは、むしろ明治日本の知識人としての漱石が選んだ生き方であり、近代化の軋轢の中に生き抜こうとする姿勢を示していると捉えることができる。

第二章では、漱石における「風流」をテーマにし、漱石の風流が、従来の研究に指摘されたように「漢詩と南画世界」に現れているだけでなく、一步を進めて、中国の文人趣味をはじめとし、彼の閑適な境地と隠遁への憧れにも見出され、しかもその根底には老荘思想が潜んでいると考察した。

まず、『思ひ出す事など』の「風流」と、その源泉となる中国の「風流観」と「老荘思想」の関係を究明した。次に、漱石本人が残った文章を取り上げながら、「風流」の定義を究明することによって、漱石の「風流」の内実を明らかにした。最後に、漱石の「風流」を、「向う側」世界と「老荘思想」の要素を加えながら、「則天去私」思想とのつながりを考察した。

結論として、漱石の「風流」には、主に「自然山水」、「文人趣味と道楽」、「隠遁趣味」、「閑適」および「高潔」という五つの要素が互いに絡まり合いながら、中国の「風流」の基盤となる「老荘思想」もところどころに現れているとまとめられる。要するに、漱石の「風流」は、こちら側に暮らしながら、詩書画をはじめとする文人趣味を通じて、彼の自然山水と隠遁憧憬を満足させる「精神的な向う側」を築き上げて、その世界に遊ぶと、彼はしばらく閑適を享け、高潔を保ち、脱俗しようとすることもできる、ということである。ちなみに、漱石の「風流たる向う側」を表している漢詩には、よく求道、「無我の境地」や「則天去私」を連想させる表現が見られる。

第三章では、漱石における「夢」のモチーフをテーマにし、「異色な向う側」という角度から彼の夢物語を考察した。漱石の夢物語は、言うまでもなく、漱石の作品の中でかなり特異である『夢十夜』を想起させる。『夢十夜』に描かれた夢が、漱石の芸術観や人生観の表白であると思われるものがいくつあり、しかもそこに溢れる「夢想的詩的」なイメージから考えると、その「夢」の世界は漱石の築き上げた、一種の異界であると見るべきであると指摘した。

そして、漱石の小説と漢詩を考察し、彼にとって「夢」の世界は、美女に邂逅し、神女のような不思議な女性に出会えるという特質を持っており、一種の異界であり、または人生が夢と溶けあい、夢も現実も混淆して一つに溶けた世界になっているという性質があるとわかる。しかも、こういう認識は、『文選』「高唐賦」「神女賦」と『莊子』「胡蝶の夢」この二つの寓言に影響されたと認められ、『夢十夜』の奇妙な夢たちも一種の寓言として読むことができると考えられよう。

『夢十夜』の世界だけではなく、「夢」という異界は、漱石の想像を十分に馳せさせる、自由自在に遊ばせる「異色な向う側」ともいえる。しかしながら、『夢十夜』その作品に潜んでいる暗闇は、漱石の「夢」の世界に付け加えられている独自の要素である。こういった『夢十夜』における暗闇と「夢想的詩的」な要素の共存と矛盾は、まさに彼の晩年の小説『明暗』という題名のように、漱石の精神世界における表裏一体となっている存在であると指摘した。

これまで考察した第一章の「空想的な向う側」、第二章「風流たる向う側」、第三章の「異色な向う側」は、多かれ少なかれ「老荘思想」の影響が見出せるのみならず、「則天去私」にも同じ傾向が認められる。

第四章では、こういった「向う側」から「則天去私」への展開を考察した。

「則天去私」という漱石の造語は、漱石の自筆で書いた解説の文章が全くないため、その内実を解明するには、「則天去私」との造語を解剖しかない。したがって、漱石の「老子の哲学」をはじめとし、彼の日記、書簡、論文や講演などに見られる老荘思想の影響を考察し、さらにそこから発見した、漱石の憧れた「則天去私」に関わる、「道」「天」「自然」「無」「虚」「真」「愚」といったモチーフを焦点として、漱石の自己表現としての漢詩と老荘思想の受容を究明した。しかしながら、漱石の求道に関わる詩は、禅と老荘思想に連想させる言葉が同時に使われていることが多いのである。その理由の一つは、中国仏教は老荘思想に大きく影響され、漱石も、禅と老荘思想を同一視することにあると思われる。ただし、漱石がその希求する「絶対の道」を説く時、「空」を全く使わず、逆に老荘思想を喚起させる「無」と「虚」を繰り返し用いると指摘した。

そもそも漱石は仏教者ではなく、仏教をはじめとし、宗教を信じていない漱石の信じる「宗教」と「神」は、彼の憧れた「絶対の王国」であり、しかも老荘的な「道」そのものであり、つまり老荘的な世界を彷彿させる「絶対無の世界」を憧れるようであると指摘した。

一方、漱石における老荘思想の受容について、従来の研究では単なる彼の「漢学素養」として考察されているが、本章では、明治時代の「東洋哲学」の形成との時代背景も取り上げて、漱石は、老荘思想を単なる「漢学」として受容したのではなく、「東洋哲学」として扱ったことを検証した。

「則天去私」は漱石にとって、作品の中で空想的な神仙世界を彷彿させる場所と、道楽である風流たる文人趣味の世界という漱石の「向う側」に遊んでいたと同じように、また一種の「向う側」世界であり、「かくれ家」でもあり、「こちら側」の代償として築き上げられた漱石の逃げ場であり、「安心立命」のために生み出した一種の哲学的な概念に見えるスローガンでもあると思われる。